

## 弔 辞

富岡先生、今日ここで、先生にお別れの言葉を述べなければならないことは、誠に残念であります。

先生は、学部では農業経済学を専攻し、大学院では途上国経済の研究を志し、大学院時代から中東に関する論文、とくにイラクの植民地化問題、パレスチナ問題に関心を持たれ、幾つかの論文を書かれました。東京大学助手として研究生生活を始められましたが、研究の出発点は、そもそも、なぜアジアには、一般に「産業革命」が起こらなかったのか、ということでありました。

神奈川大学に研究の拠点を移してからも、開発経済理論および途上国経済の研究を通じて、引き続き当初の問題意識を深化させるために、努力を傾けられました。不幸にして昨年の夏以来、病に伏せられましたが、病床にあっても復帰後の、今後の研究について色々のご計画を持っていたと伺っております。

残念ながら、それを実現することは不可能になりました。しかし、昨年の11月、それまでの研究の成果を纏められ、いわば富岡経済学のひとつの到達点として、『機械制工業経済の誕生と世界化—南北問題の経済学—』を上梓され、世に問うことが出来たことは、今となっては幸いなことでありました。

先生は、経済学部では「新興国経済論・開発経済学」の研究・教授を通して、学部生及び大学院生の育成に精力を傾注し、優秀な若手研究者を多く育てられ、教育者としても優れた足跡を残されました。また学生のスポーツ活動を重視して、軟式野球部の部長となり、全国学生軟式野球連盟会長として、神奈川大学だけでなく、日本及び中国の学生軟式野球の発展に寄与されましたことは、多くの人の知るところであります。

また、かつて1960年代、共産主義者同盟（ブント）の創設に関わったことのある先生としては、当初おそらく思いもよらなかった大学理事に就任されて、学費の改定問題でご苦労され、また経済学部長として平塚の二学部開設に関わり、また常務理事として大学発展のために大変なご苦労をされました。

学問的には、鋭く、ある時は過激とも言える議論を展開していた先生が、大学の行政に携わざるをえず、戸惑い、悩み、苦しんでいる姿を拝見することがしばしばありましたが、先生は、経済学部の発展、大学の発展のために耐えてこられました。

先生は、大変な愛妻家でありました。話の折々にも、うちの女房は、うちの女房は、という言葉をよく口にだされ、愛妻家ぶりを遺憾なく発揮していました。また、お嬢様の史穂さんをこよなくかわいがっておられました。病院にお見舞いに行くと、史穂さんが、フランス留学に出発する時にとった写真をうれしそうに見せてくれました。

先生に、私が、初めてお会いしたのは、20年も前のことになります。先生がシリアでの在外研修を終えられ、帰国したときのことでしたが、そのとき見せていただいた写真には、シリアの調査地でお嬢様を膝の上に抱えられた、先生の、日に焼けた、幾分、精悍な感じのするお姿が写っておりました。そのとき赤ちゃんだったお嬢さんもすでに、大学4年生となり、現在、就職活動中とのことで、もうすぐ社会人、先生も一安心されていたのではないかと思います。

文章にうるさく、議論好きの、舌鋒鋭い先生でしたが、相談を持ちかけると本当に親身になって話を聞いて下さる優しい先生でした。

今日ここで、そのような先生にお別れしなければならないとは、誠に残念であります。しかし、致し方ありません。

先生、お疲れさまでした。また、色々お世話になりました。有り難うございました。どうぞ安らかに眠り下さい。

1998年4月18日

神奈川大学経済学部長

池上 和夫